

Title	まえがき
Author(s)	平野, 憲雄
Citation	技術室報告 (2002), 3
Issue Date	2002-03
URL	http://hdl.handle.net/2433/233237
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

まえがき

技術室長 平野憲雄

ここに技術室報告3号を発刊できたことを投稿者はもちろんのこと編集に当った皆様に深く感謝申し上げます。いつも思うことですが、我々技術者は腕を磨くことには熱心だけど、身に付けたノウハウを他人に語ることや文章にして残すことは苦手なものです。防災研究所の技術者に若手が採用されない期間があまりにも長く、自分の技術を伝える相手が皆無であったことも手伝って、技術の継承に無頓着な気質を持ってしまったことが原因の一つかもしれません。時代は、次々と新しい技術が生まれ否応なくその技術がなければ仕事ができない環境になりつつあります。せっかく習熟した技術では食べていけないほど変わった職業もあります。これらの経験をした技術者は永年に亘って築いた技術の自信がぐらつき、ますます発表する意欲を失うことになっているかも知れません。まだまだパソコンアレルギーが残る世代が多い技術室ではありますが、投稿者の皆様から電子化した原稿をいただきました。予想した通り専門外の読者にはチンプンカンプンの語句の羅列のままです。もっと分かりやすく、足りない部分についてはさらに取材を重ねて著者の言わんとするところを汲み取り文章起こしの編集までした方々の努力は大変なものでした。しかし、取材すれば答えられる経験を持っているのです。「ネタがないから文章にならない」のではありません。自分の技術や経験のアピールの仕方が分らないか、他人にアピールする必要性を感じないかだと思います。自分の持てる技術にもっと磨きをかけたり、もっと広く貢献するにはやはりアピールしておかねばなりません。他人に伝わらなければ、工夫や価値が埋もれるどころか、せっかくの資産が再現不可能となって消えていくのと同じになります。

永年培った技術や経験を技術室報告のような見える形で残すことは、後から続く後輩にとっての貴重な財産となるはずと信じています。技術そのものは古くなるかもしれないが、そこに工夫や失敗から学んだ教訓が伝わるからです。この工夫や教訓はいつの時代でも通用する価値あるもの＝財産になるのです。残しておいて良かったと思う人が増えていくことを切に望みます。